

---

# 手のひらを太陽に。

五十嵐公生

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

手のひらを太陽に。

### 【Nコード】

N2404C

### 【作者名】

五十嵐公生

### 【あらすじ】

なぐも公立南雲高校のとあるクラスの物語。

## 第一部（１）

「プッシュー」つと間抜けな音を出して、電車の扉が開く。今時珍しい旧型の赤い列車が目の前に停車した。

五十嵐明は重そうに膨らんだ赤いドラム缶バッグを右肩に掛け、開いてる扉に吸い込まれるように電車の中に入って行った。電車の中は閑散として、可動音だけが聞こえてくる。明は、車内を見渡した。車両の一番後ろに白髪と黒髪が入り混じって鼠色の髪の四十代半ばくらいの初老の男性が乗っていた。その男を避けて、車両の一番前の窓際の席に座り、隣の席にバッグを置く。

「ふう」と小さくため息にも似た息を吐き、静かに目を閉じる。新たな場所への期待と不安を募らせた表情は緊張感に満ちていた。移動の疲れのためか、いつしか明は眠りについた。

明が目を覚ました時にはもう外は真っ暗になっていた。閑散としていた車内はたくさんの人がいて、全ての座席がうまつていた。人がたくさんいるのに話し声はなく、みんな疲れきった表情をしていた。冷めた目で携帯電話をいじる女子高生、缶ビールを飲みながら天井を見るサラリーマン、寄り添いながら眠るカップル、でかいいびきをかいて眠るハゲたおじさん。みんな世の中に疲れているようだった。

明は思い出したかのように慌てて窓から外を見て、見覚えのある景色に安堵した。

良かった。まだ江別駅じゃない。

明はバックからおにぎりを取り出す。電車に乗る前に駅の売店で購入したものだった。

機械的な味のおにぎりは空腹の明の食欲を奪い、半分ほど食べたところで、手を止め、少しの間をおいて残りを口に押し込み、お

茶で胃袋へと流し込む。

「次は高砂、高砂に止まります。」おにぎりを食べ終わるとちょうど目的地のひとつ前の駅を告げるアナウンスが流れた。

明は、荷物をまとめ席をたち、電車のデッキの窓から外をのぞく。明の瞳にはたくさんの星が映っていた。

江別駅に着いた明は、改札を出て叔父の姿を探す。

黒く日焼けをしたタンクトップにスウェットに角刈りの男性が目に見え、飛び込んできた。それは間違いなく明の叔父五十嵐勉だった。

勉の姿を見つけた明は重いバッグを持っていることを忘れ駆け出した。どうやら勉はまだ明に気付いていないようだ。

「おじさん」我慢しきれずに叫んでみた。

「おう」勉は声のする方を向き、右手を振る。勉に目が行ってたせいで話しながら歩いている女子高生にぶつかりそうになる。それを明は体格に似合わない機敏さでかわし、ようやく勉のところにたどり着く。実際は十メートルくらいに距離だったが、一人旅の孤独感を朝から味わってた明にとっては本当にやっとの距離だった。

「お疲れさん」勉は明のバッグを持ってやる。

「別に疲れてないよ」見栄を張ってみる明。

「本当か？何か疲れた顔してるぞ？」勉には全てお見通しのように。いつも悩んだり、隠し事をしてもおじさんは俺の心を見透かしてるかのように確信をついてくる。もしかしたら母さんよりも俺の変化に敏感かもしれない。

隠しても無駄だから「正直ちょっと疲れた」という。

「そっかあ。やっぱり疲れたか。したら早く帰って寝ような」

「うん」勉は明の頭をなでる。

「姉貴が晩御飯、お前の好きなから揚げを作って待ってるぞ。」勉は車まで歩き出す。

「ホント？なら早く帰らなきゃだね」

「俺もお邪魔するな」

「良いけどお酒は出さないよ」

「バカ。教師が酒飲んで運転できるかよ」

「教師関係ないからね」

「だよな」

「そうだ。おじさん、車出してくれてありがとね」

「姉貴の息子の頼みを断れるかよ」勉は、優しく微笑み、後ろを歩く明のほうを向く。

「本当にありがとね」

「お前の頼みなら車くらい出してやるよ。頼まれても金はやれないけどな」

「叔父さんの少ないこ使い奪わないから安心して」

「少ないはよけいだ」勉は日焼けした顔をほころばせて笑い、明もそれにつられて笑った。

勉の車は日産のブルーバードシルフィーで白いボディが眩しいほど磨き上げられている。

勉は右ポケットから鍵を取り出し、後部座席の扉を開け、明のバッグを放り投げる。

勉はヘビースモーカーなのにもかかわらず、車は禁煙車でしかも土足禁止だった。

「明、ちゃんと靴脱げよ。」

「叔父さん今時土足禁止の車なんてないよ」車が走り出してすぐに明が言った。

「お前はアメリカに毒されてるな。室内では靴を脱ぐのが日本の文化なんだよ」

「結局車が汚れるのが嫌いなんですよ？」

「正直な」勉がまた人の良さそうな笑顔をルームミラーに映す。

二ヶ月ぶりに帰ってきた自分の家は他人の家のように、なんだかひんやりした感覚を明は覚えた。

「ただ今」出迎えてくれた母、遙に明は笑顔で言う。

「お帰り、何だか少し大きくなったね」明は自分の体を少し眺めてから「そうかな？」と言う。

「やっぱりそうだよな？」明の隣でまじまじと明を見て勉が言う。

「それより早く二人とも家に入って入って」

2LDKの明の家は母子家庭にもかかわらずあまり生活感のなく綺麗に片付けられている。

玄関を入りすぐ左側に明の部屋があり、玄関のすぐ目の前の扉が居間に繋がっている。

玄関から居間に入ってすぐ左に遙の寝室がある。

居間には50インチの液晶テレビがあり、もちろん地上デジタル放送に対応している。

このテレビは昔からくじ運の良い遙が懸賞で当てたものだった。

そのせいもあってテレビはどこかこの家の雰囲気から異質していた。明はすぐに居間に行かず、まず自分の部屋に向かった。

重いバッグを置きたかったし、しばらく離れて、自分のテリトリーを忘れているこの部屋に自分を思い出させたかった。

贈り先で、荷造りをしてる時はすごい量に思えた荷物も自分の部屋で眺めてみるとたいした多くは感じなかった。

ベッドで横になってみた。久しぶりの自分のベッドはホテルのベッドのようになんの感情のない人間のようだった。

ベッドでこうして横になってるとたった二ヶ月が途方もなく長い歳月に思えた。

思い出したくない過去がよみがえってきてそうだったので頭を振った。こんな事で消えてくれるなら何回でも頭を振るのに。

「ガチャ」明の頭上で扉が開く音が聞こえた。

「ご飯出来たわよ」遙が顔をのぞかせる。

「良い匂い」明は上半身を起こし鼻で二、三回息を吸い込む。

「今日のから揚げは特別に上手くいったわよ」

「それ、いつも言ってるよね？」

「今日はホントにホント」

「了解。信じますよ。」

「まだ信じてないでしょ？」

「しつこいなあ。信じてるから早く食べましょ、食べましょ」明はせかすように遥の背中を押して居間に向かった。

居間では既に勉が出来上がっていた。

「おお。明」ビールの入ったグラスを左手に持ちながら明の方を振り向く。

「おじさん、もう出来上がってるね」

「は？これっぽっちで酔うわけないだろ？」

「顔赤いよ。」

「元からだ。お前も飲むか？」

「まだ、十六だから酒飲めないからね」

「年上からの誘いは断っちゃダメなんだぞ」

「勉！あんた教師でしょ？何未成年に酒勧めてるの？」

「教師は十七時までだよ」

「昔から口だけは達者ね」遥は呆れ顔で台所に行った。

明は、勉の隣に座り、テレビに目を向ける。「また広島負けてるね」

「ああ」勉は悲しそうな顔をする。

台所からから揚げとサラダを持って遥が姿を見せる。

「さあ、食べましょ」遥はご飯をテーブルにのせて、明たちの前の席に座る。

「いただきます」三人、手を合わせて言う。

「てか、おじさん車どうすんの？」

「あ！忘れてた。」三人はいつせいに笑った。

## 第一部(2)

明が遙に起こされたのは朝8時半過ぎの事だった。

久しぶりの実家のベッドで明はなかなか寝られず結局午前4時にようやく眠りに着いた。

そのせいで明はまだ眠むかったが、遙は明のそんな事情なんてお構いなしに明をたたき起こした。

「母さんまだ眠いんだけど」肉で埋まった目を寝不足でさらにはらしながら明は遙に哀願するかのようにごねる。明のこもった声のせいか、遙には聞こえてないようだ。拡声器を使ったような声量で遙は「馬鹿!! ゴールデンウィーク終わったら学校なのよ。準備しなきゃでしょ?」と言う。遙の甲高い蝙蝠こうもりのような声が明の部屋中に響き渡る。遙はその太った体格からは想像出来ない機敏な動きで明をベッドから出し、明のベッドの布団をベランダに干す。自分のテリトリーを奪われた明はスイカー一個全てが入ってるかのようなお腹をかきながら開いてるか閉じてるかわからない目をして居間に向かう。「おはよう」明が居間のドアを開けた瞬間聞き覚えのある声が聞こえる。

「おじさん、おはよう」勉が眠気なんて微塵も感じさせない笑顔で明を出迎えた。

確かおじさんが帰宅したのは4時くらいだったよな?。

「昨日広島逆転したって。前田が阪神の藤川からサヨナラ満塁ホームラン打ったみたいだぞ」唐突に野球の話をして寝起きの悪い明にははじめは理解できなかったが、しばらく考える間を置いて明が答える。

「本当? 良かったね。おじさん」まだ目の覚めてない明の顔は軽く引き攣っていた。明はのそのそと勉の隣に座る。

「そうそう、今日はお前の制服買いに行くみたいだぞ。ゴールデンウィーク明けから学校だよな?」

「そうらしいね。めんどくせえ」明は立ち上がり台所の冷蔵庫を物色する。

「まあ〜そういうな。お前は頭良いんだからとりあえず高校だけは卒業しろよ。」チャンネルをまわしながら昨日の広島試合結果のハイラアトを探す。

麦茶を右手に持ってまた勉の隣に座り

「うん」と中身のない返事を返す。

「ご飯食べましょ？」居間に遥の声がひろがる。

「今日は何？」

「トーストと目玉焼きで良いかしら？」台所に向かう遥。

「朝、あんまり食べれないからそれで良いよ。おじさんもそれで良いよね？」

「ああ」広島カープの試合のハイライトに集中しているためあまり明の声は聞こえてない様子で勉は答える。

「おじさんもそれで良いって」明も試合のハイライトに釘づけになっているようで気のない返事を遥に返す。

「男ってどうして野球なんて好きなのかしらね」トースターをテーブルに置きながら遥がぼやいた。

「姉貴！！野球なんかとはなんだよ！！」勉が噛み付く。

「野球はなあ〜男のロマンだぞ！！筋書きのないドラマだぞ」

「はいはい」遥は丸々太った体型と同じく太い神経の持ち主らしい遥は全く勉を相手にしていない。遥は着々と朝ご飯の準備をしている。

「姉さん聞いているの？野球を馬鹿にするやつは野球に泣くんだぞ！！」

「それは一円を笑うやつは一円に泣くじゃないのかしら？それとも野球が一円の価値しかない事の例えかしら？あら？それなら筋書きのないドラマってたいした事ないのね？」

「あつ！！いや……」言葉に詰まってしまい助けを求め辺りを見渡す勉だったが、目の前にはトースターにトーストを入れる丸々と太っ

た甥っ子しかいなかった。

叔父の悲痛な視線に気付いた明は

「おじさんの負けだよ」と叔父を皮肉る。

「はい…」 勉は気のない小さな返事を返した。昨日、明の家で酒を飲んだ勉は結局、明の家に車を置いて帰る事にした。

勉が車を減速し、ギアをセカンドに変え、左折しようとした時に

「勉、本当に助かるわ」と後部座席から遙が話し掛ける。

ルームミラーで姉に目をやり

「ああ良いよ。」と返事をし、また運転に集中する。

明の家は市営の団地で築30年くらいは経過している。

トイレは遙の意向で和式だったのを勝手に洋式の水洗に変えた。内装も、知り合いの大工に頼んで格安で工事してもらった。

ただ、外装は変えられるはずもなく築30年を余裕で過ぎてる風格さえ漂っている。

本来車も駐車禁止なのだが、市の職員が団地を訪問する事も滅多にないので勉はいつも勝手に駐車していた。

久々の地元を車の窓から穴があくくらい黙って見ていた明が口を開いたのはちょうど勉が国道12号線にさしかかるカーブを左折した時だった。

「ねえ」ところでどこに制服買いに行くの？」

「姉貴どこに制服買いに行くんだ？」 勉も解っていなかったらしい。

「え？制服って普通の服屋さんに売ってるんじゃないの？」 遙も解ってなかったらしい。

なんとか遙の言ってた

「普通の服屋」に制服があることが携帯電話で確認がとれ三人は安堵した。

「まずは、スリーサイズ計りますね」 さえない女芸人みたいな男性店員が明のバストと思しき場所を計る。

明の驚異的とも言えるスリーサイズを計り終えた店員は

「制服特注になりますね…。」と明を殺すのには十分な言葉を発する。

「いつもの事なんで予想は出来てましたよ。何日くらいかかりますか？」

「一週間くらいで出来上がると思います。」

「あら？学校には間に合いそうにないわね。仕方ないわ。」遥はそういうとお金を先払いして店を出た。

明と勉もその後続く。

「特注になってごめんね。」自分の体格を悔やむかのように遥に謝り俯く明に遥が

「気にしなくて良いのよ。男の子は後で身長にくるんだから」と良い。ブルーバードシルフィーの後部座席に乗り込む。

勉ももう運転席に乗り込んでいる。

「あー！なんかサッカーくじ買いたくなつたから宝くじ売り場寄つて」

「はいはい」遥の気分に振り回されるのに慣れている勉は帰宅なら本来左折の道を右折した。

買い物等をして結局家に着いたのは20時くらいだった。

明は寝ていないせいもあって風呂に入らずに倒れ込むように自分の部屋のベッドで寝てしまった。

勉はこの日は酒も飲まずに明達を置いてすぐ帰宅した。

公立南雲高校は創立1957年。総生徒数1987名。現校長、南原直樹。東京ドーム4個分の広さがある、マンモス校である。制服はあるのだが行事の時しか着なくて良いという変わった学校である。

明が南雲高校に初めて登校する時に選んだ服はダボダボのジーンズと大きい真っ赤のパーカーだった。頭にはパーカーと同じ色のバンドナを巻いてジーンズはトランクスが見えそうなくらい下に下げてはいていた。眉毛は１ミリくらいの細さまで剃った。自分が思う不良に出来るだけ近づけるように努力した。

「おい！！転校生入れ！！」転入生だろ？アホ教師。

明は自分の中の精一杯の不良歩きで教室内に入る。一瞬教室内の空気が冷え切ったのを確かに明は感じた。

よし！！出だし上々。

「私立厚海高校から転校してきた五十嵐明君だ！！みんな仲良くしてあげてな！！」この時初めてマジマジと教師の顔を見た明は空気が冷え切った本当の理由を知った。

明を紹介したこの教師の顔は顔面凶器としか言えないような顔をして、タンクトップから出ている素肌が筋肉で覆われ、胸板はゴリラくらいある。１年Ｂ組の生徒はこの教師の圧力で無反応で良いはずの「仲良くしてな！！」という社交辞令にも反応している始末だった。空気が一瞬冷たくなるのではなく、この教師のせいで冷めきっているのだった。

ただ一部だけを除いては…。

## 第一部(3)

「あいつなんかムカつかね？」窓側の1番後から2番目の日焼けをした濃い顔の生徒が後の席の生徒に言う。

「ああ。またここの規律教えてやるか。」1番後の生徒が不敵に笑う。

明が南雲高校の初めての昼休みを過ごしてる時だった。1人の生徒が話しかけて来た。

「お前、この学校ででかい面すんなよ。」明はそいつがからめてきた手を振り払う。

「は？校則にはでかい面したらダメなんて書いてなかったよ(笑)」

「お前馬鹿にしてんのか？あんまり調子のんなよ。」

「のってねえ」から。「明は精一杯強がり、立ち上がってそいつの顔を睨みつける。

「まあ、ここで言い争っても意味ねえ」から2ヶ月後にお前と俺でタイムマンやるべや。」

「今すぐじゃなくて良いの？」自分の足が震え出しそうなのを必死でこらえ強がる明にそいつは

「お前に合わしてるんだよ。感謝しろよ。」といい笑う。その笑みには悪意が満ちていた。

「その感謝って拳で返して良いの？」明は右の拳を左の掌にたたきつけた。

「好きにしろ。」また不適に笑う。

「おい！！氷室、リング借りれたぞ！！」黒くやけた肌を出した白いタンクトップの濃い顔の男が現れた。

「蘇我、サンキュー。したら2ヶ月後、ここにこいや。」蘇我と呼ばれた男から渡されたノートの切れ端を明に渡し、氷室と蘇我と言

うやつは去っていった。

氷室達が見えなくなつて、一気に気が抜けたのか、腰が抜けたのか力無く椅子に座り込んだ。

やばい。やばすぎる。どうしよう。

明の顔は今にも泣き出しそうなのを必死で隠し、目は焦点があつてなかった。

帰宅した明を最初に出迎えたのは頭の悪そうな犬だった。

豆柴か？

明の事を知らないくせに人懐っこく、何の疑いもなく明の足にすりよる。

「ただいま」誰もいないのは気配で感じてたがいつもの癖で言ってしまう。

居間に行くとき置き手紙があつた。「今日から飼う事になった柴犬が明を迎えてくれたと思うけど、まあ明勝手に名前つけといて、明の部屋の机の上に1万円置いておいたから勝手にご飯食べて下さい。お釣りはちゃんと返してね。母さん今日遅くなるね。」手紙を読み終わると床に横になりながら柴犬を抱き抱えてみた。

「お前、名前、何が良い？お前、雄かあ…。どんな名前が良い？」

近い現実から逃げるかのように喋るはずのない犬に話し掛けてみる。「クウーン」困つたように首をかしげる犬を見てため息をついた。

「名前かあ…。どうしよう…。」明はそのまま犬を抱えて寝てしまった。

「豚！！」顔のない学生服の生徒が明にむかつて言う。

「豚！！何でお前生まれて来たんだ？死ねよ。お前死ねよ。」大きい体の顔のない生徒が明に言う。

「豚！！豚！！豚！！豚！！」生徒全員が言う。

「やめてよ！！やめてよ！！俺何もしてないだろ？やめろ！！やめろ！！」明の叫びに呼応したかのように、生徒の一人が

「うわー!!」と叫び声を出した。

明は思わずその生徒の方向に目がいった。

「ワン!!」大きい柴犬が生徒達を薙ぎ倒して明の所に駆け寄る。

明はその犬にくわえられ、犬は明を助け出した。

「ハアハア」明は全身に汗をかき、肩で息をしていた。

「クウーン?」気付くと柴犬が明の顔を舐めている。

「お前、助けてくれてありがとうな。」柴犬はわけが解らないかのように首をかしげて

「クウーン?」と言う。

また寝そべりながら、犬を抱えてじっくり柴犬の顔を見る。かわいらしく、頼りがいのないように見えた顔だったが目にはしっかり強い光がやどっていた。

「お前の名前決めた。英雄<sup>ヒデオ</sup>、俺の事助けてくれた英雄<sup>えいゆう</sup>だから英雄<sup>ヒデオ</sup>」柴犬はその名前を気に入ったように尻尾を振って明に答える。さて、名前も決まったし、現実から逃げられないな。頑張らないと。

明はパソコンを立ち上げて何やら調べはじめた。

次の日、明が訪れたのは近所にある古びた小さな建物だった。

夏川ジム。ここだあ。ここ。

明は今にもはずれそうな扉を開いて

「初めましてよろしく願います。五十嵐明と申します。」明は頭を下げながらそう言った。

「お前か?拳闘をやりたいと言うやつわ」奥から60歳過ぎくらいのハゲ散らかした親父が出てきた。

「はい!!そ、そうです。」

「そうか、まずはわしについてこい!!」そういつと親父は出ていった。

自転車にまたがって走り出す親父に明は疑問を覚えながらついてい

く。

5分も走らないうちにもう辛くなってしまった明は道端にへたりこんでしまった。

「そんなんで拳闘が出来ると思うか？立て！！立つんじゃ！！」親父は明をまくし立てる。

明の脳裏に前の学校のやつらの顔が浮かぶ。

明は震える足に必死にいう事を聞かせる。

俺の足だろ？勝手にへばってんじゃねえよ！！

明は立ち上がり遅いながらも必死で走った。

頭が真っ白になるまで、倒れるまで走った。

「バシャッ！！」ハゲた親父がバケツの水を明にぶちまける。

「うつ…うつ…」

「ようやく目を覚ましたようじゃな？」

「俺はどうしてたんですか？」「見て解らんのか？倒れてたんじゃよ。」

「そっかあ…。」うつむく明にハゲた親父は

「こんなにもつとわな、上出来じゃよ」そういうと明を立たせて

「今日はこの辺にしとか、体を鍛えるのと無理をするちゅうのは違うからな。今日はゆっくり休んでまた明日、来い。」

「はい…。」力無く答える明に

「疲れてても声は出るじゃろ？」と親父は言った。

「はい！！」明は力いっぱい声を出して返事をした。そして明はジムをあとにした。

家に帰った明を出迎えたのは英雄を抱いた遙だった。

疲れて重たい体を引きずりながら帰宅した明を見て心配そうにしていたが

「ただいま」と言った明の顔を見て安心した。

「あんた、何はじめたか解らないけどさ最後まで続けなさいよ。」

「うん。」そう言つて明は自分の部屋に引きこもった。

体が鉛みたいに重たく、すぐにでもベッドで横になりたかつたのだ。空腹で目覚めた明は時計を確認した。

ベッドのわきの時計を掴む。

「2時かあ…」明はベッドから立ち上がり、居間に向かった。

居間のテーブルにはラップをした焼きそばがあった。

「きつとお腹減つて起きると思うから焼きそば作つといたからチンして食べなさい。ちゃんと食べた後歯を磨くんだよ。」昔、習字をやつていただけあつて遙の字は癖がなく整っている。

あんがと、母さん。

明は焼きそばを温めて食べた。手づくりの遙の焼きそばは不揃いな味だったが1番好きな味だった。

寝る前よりはるかに重くなった体を無理矢理動かし自分で考えたトレーニングメニューをやった。

お風呂場でシャワーのお湯をあてながら全身を揉みほぐした。

明日のジムに向けて出来るだけの準備をして明はまた深い眠りについていた。

目覚ましに起こされた明は解つてはいるが時間を確認した。

7時かあ…。

明は起きて居間に向かう。

「おはよう」遙が笑顔で出迎えた。

「うん。おはよう」あくびをしながら挨拶をしたのでマヌケな声になつてしまった。

「あんた、ワンちゃんに名前つけた？」野菜をきざみながら明に問う。

「英雄ヒテオにした。」明が自分の名前を呼んだことに反応し、明のこ

ろに擦り寄る英雄はまだ夢うつつの明の足をペロペロなめて

「クウーン？」とないて首をかしげる。

「何でひでおなの？」きざんだ食材を炒める音が聞こえる。明は英雄を抱き抱えて座ってテレビをつけた。

「英雄は俺のヒーローだからだよ」

「何よそれ。まあいいわ。今日は野菜炒めね。」

明は大きくのびをした。

## 第一部（４）

がに股で周りを威嚇しながら歩く不良歩きで２回目の南雲高校を訪れた明にとって想定内の悲しい事が起きた。

誰も明を見ようとしなかったのだ。

「ガラガラ」と音を立てて扉が開く。

明は教室の後の扉から教室に入った。

一瞬教室内にいた人達数人が明を見たが、すぐに視線を別のところに移した。

そしてさも、誰も来ていないかのように今までの行為の続きをやる。やっぱり氷室達はこのクラスで大きな権力をもっていた。

まあ、仕方ないか、俺も逆の立場なら俺みたいないやつに関わらないもんな。

明は小さくため息をつき、廊下側の１番後の席に座り、机に伏せるように寝た。

昨日の走り込みで体が重かった。

目をとじるとすぐに深い闇の中に吸い込まれていった。

「キーコンカーンコン」明が起きたのはチャイムの音でというか、周りの雑音のせいだった。

色んな言葉が飛び交い、一つの騒音と化していた。

目を擦りながら黒板の上の時計で時間を確認する。

どうやら昼休みようだ。

皆それぞれ自由な席に座り、中身の無い話しをしている。

明は立ち上がりのびをし、地下にある学食に向かった。

学食には誰もいなかった。

営業してないのかな？

明は不安になり

「すみません！！」と叫んだ。

奥から新聞を畳む音が聞こえる。

「あん？どうした？」怖い顔のおっさんが出てきた。

「あー！！」明は思わず叫んだ。

「ああ。お前かあ。そういえばずっと授業中寝てたな。」

「てか何であんたここにいんの？」

「趣味で学食のおっさんやってんだよ。つゝか担任にむかってあんなって何だ？」明の担任、早乙女みのは顔面凶器を近づけてくる。

「ご、ごめん。」

「まあ良い。それより何しに来た？」

「普通に飯食べにきただけ」

「ああゝそつか。したら何食べたい？」

「カツ丼」「分かったカツ丼な。出来たら呼ぶから好きな席に座つてろ」早乙女は調理場に姿を消した。

明は1番後の角の席に座った。

席に着いてまた、ため息をつく。

何でここ誰もいないんだ？

10分くらいで調理場から

「飯、出来たぞー！！」とどすのきいた声が聞こえた。

立ち上がり、カツ丼をとりに行く。

見た目は悪くないな。

明はカツ丼を持ってまたさっきの席につく。

見た目は悪くないから大丈夫だろうと思い、箸を持つ。一口食べてみた。

「うめえ」思わず声が出てしまうくらいの美味しいカツ丼だった。つか、何でこんなうめえゝのに誰も来ないんだ？

食べ終わり、金を払うためにレジに向かう。

早乙女がその様子を見て、レジに来る。

「5250円な」

「え？一桁間違つてない？」

「いや、間違いなく5250円だ」明は渋々金を払い食堂をあとにした。明が食堂から出るのと入れ代わりにどう見てもモデルのような白衣を着た女性が食堂に入って行った。

それと同時に早乙女の声が聞こえた

「待ってましたよ。今日は何にします？」いつものドスのきいた早乙女の声とは違う声だった。

どうやらあの人は常連らしい。

そして何でこんなに甘美味い学食が閑古鳥が鳴いてるのは明らかだった。

学食なのにアホなくらいに値段が高いのだ。

明は財布を見てため息をついた。今月の小遣いもうないや…。

その日は結局氷室達は学校に姿を現さなかった。

内心ホツとし、気がぬけた明は放課後ジムの時間まで学校の屋上で寝ていた。

「君、2ヶ月後に人生が変わるよ。幸せになる。僕には解る。したらおやす。おやす。」その声にたたき起こされた明は声の主を探す。探すまでもなかった。

明の目の前数センチにでかい気持ち悪い顔があったからだ。明は思わず

「わっ！！」と言いそうになったが、必死でこらえた。

目の前の声の主は自分の言いたい事を言っただけで横になったままコロコロ転がり、はじめの方で、もういびきをかいて寝始めている。

そいつのいびきのせいですっかり夢の中から現実に引き戻されたの

で少し早めに明はジムに向かう事にした。  
太陽はもうオレンジ色を放っていた。

夏川ジムはこの前の閑散とした感じとは違っていた。

「こんにちは」明は扉を開き挨拶をする。

また奥からハゲた親父が出てきた。

「よう、来たな。では早速始めるか。着替えてこい。」

「それより今日はなんだか騒がしいですね」明の問いに答えるようにジムの中の一点を見る親父が

「なんか朝からあやつが来てな、サンドバッグを打たかせろと言うから勝手に打たせてるのじゃよ。お陰でわしは寝不足じゃ。」明は親父の目線の先を見たが見ていないふりをした。その顔はどこか見覚えがあつた。明は確かに親父が

「南雲高校にはあんなのしかおらんのか」と呟いたのを聞いた。

この日も明は倒れるまで走らされた。

また顔に水をあびせられ起こされた明は今までの疑問を親父に問う事にした。

「親父さん、走ってばかりで強くなれるんですか？」

「わしの目から見てお前はやっぱり余計なものがつきすぎとる。だから今はそれを取りながら、スタミナと体にキレをつける段階なのじゃ。お前は脂肪という重りを体につけてた分、それを落とせば筋肉の鎧に覆われてるはずなのじゃ。とにかく今は体をしぼる事に専念するんじゃ。なんだかんだで昨日より10分は長く走ってるんじやぞ」

「そつかあ。ありがとうございます。」明は立ち上がり着替えて帰宅した。

明が帰宅した時には遙はすでに帰宅していた。

「お帰り」遙の声だけを確認し、明も

「ただいま」と返した。

疲れていて、俯いた顔を上げる事も辛かった。

そんな明を英雄も出迎えた。明の足に尻尾をふりながら擦り寄る。

「この前買ったtotoo当たってたのよ。実は。」

「うん。おめでとう。」感心のない反応をする明に遙は

「6億円って重いよね。」

「ん？6億円？え！！あれ当たったの？」

「そうなのよ。さつき言わなかった？」遙は居間から台車に乗った6億円を出してきた。「母さんこれどうすんの？」明は台車のお金を見ながら尋ねる。

「とりあえず車買って残りはスイス銀行に貯金しとくわ。好きな車あったら言ってね。あと明日からあんたバイクの免許とりに行きなさいよ。」

明はただただ啞然として

「はい」と言うしかなかった。

## 第一部(5)

この日も氷室と蘇我は学校に姿を現さなかった。内心安心した明はバイクの中型免許を取るため家の近くの自動車学校に手続きをしに行った。

窓口で遥が取ってきてくれた住民表と受講料の16万5000円を払い、その場をあとにした。背中越しに笑顔で

「ありがとうございます」と言う事務の女性には目もくれず明の視点はある方向に釘づけだった。

同じクラスの小林龍地がバイクのアクセルスロットルを絞るようにし「ブン、ブン」と言いながら窓口に向かってくる。

明はかわらないように見ないふりをしながらその場をあとにした。

自動車学校から直接夏川ジムに向かったはずなのに小林龍地はすでにジムでサンドバッグを打ちながら

「あとー」と叫んでいた。

「親父さん、なんか寝れてません？」

「当たり前じゃ、お前が来るまであいつのミット打ちの相手をさせられてたんじゃからな」

「そうなんですか。でも僕と一緒にあいつも素人ですよな？」

「そうなんじゃが、恐ろしいほど飲み込みが早くてな、冗談で『この漫画からボクシングを学べ』って言うって『はじめの一步』って漫画を貸したんじゃが次の日、つまり今日、その漫画のキャラの全部の得意技をほぼ完璧にマスターしてしまったんじゃよ。ただパンチ力はあるまいんじゃがスピードが早過ぎて老いぼれにはきついわ。』そう言うって汗を拭い外に出る親父のあとを追いつつもジムを出

た。

今日も倒れるまで走り込みをさせられ、水をかけられ、起こされた。

明はカレンダー6月8日の所にバッテンをつける。もうカレンダーのバッテンも30個になっていた。

明はなる前の携帯電話のアラームを切り、ヘルメットを持って家を出た。

免許取得祝いで遙が買ってくれたビッグスクーターに跨がり、夏川ジムに向かう。

「おはようございます」ジムの扉を開き、挨拶する明に夏川茂次は「体重計にのれ」と言い、明に体重計を渡す。

それを床に置き、ヘルメットなどをリング横のベンチに置く。

「70キロじゃな。178センチでその体重なら良いじゃろ。」

「はい。」明は体重を確認しながら返事をする。

「お前がここに初めて来た1ヶ月前は105キロだったからな。毎日の走り込みで35キロの減量に成功したわけじゃが、どうじゃ？最近体は軽くなった気はするか？」

「あんまり実感がわかりませんね。正直。」

「そうかあ。意外と人間は自分の事には気付かないもんじゃよ。お前は最初5キロ走っただけで倒れてたんじゃ、今では25キロくらいなら余裕で走れるじゃろ？それが変化じゃよ。」

「はあ……。」

「今日はお前にジャブを教えてやる。」

「ありがとうございます。」

「御礼はジャブを出来るようになってから言え。」

「はい……。」

「それじゃ、着替えて外行くぞ！」

「は、はい…」 明は困惑した表情をしながら着替えるために更衣室に向かった。

茂次に導かれ着いた場所は大きい木が真ん中にある閑散とした滑り台とブランコしかない公園だった。

「良く見てるんじゃないぞ。」 そう言うた茂次は大きい木を蹴った。

「カサカサ」と木葉が擦れ合う音が聞こえ、数秒後に葉が落ちてくる。その葉を茂次は左手で素早く何枚も掴んだ。

あまりの速さで明の目はそれをとらえる事が出来なかった。

「昔は50枚くらいは余裕で掴めたんじゃないが今は30枚がやっとじゃ。まあ、お前はまだまだじゃから10枚掴めたら次にいかせてやるわい。とりあえず1週間以内で10枚掴めるようになれ。」

「は、はい…」 自信のない事を隠しきれない明はまた俯く。それを見た茂次は「困ったら『はじめの一步』を読め！解ったな！！」と言い明の背中を叩いた。

「はい…」

結局その日は葉っぱ10枚なんてとれるわけもなく最高記録の3枚の葉を握りしめて夜中の2時に帰宅した。

家の周りは静けさが漂っていたので明はバイクのエンジンを切り、家の近くからは押して車庫に入れた。

明が帰るとやはり遙は寝ていて、いつものように置き手紙が置いてあった。

「今日も頑張つて何かにあけてるみたいね。そんな事、若い時にしか出来ないから存分にやりなさい。ご飯、冷蔵庫にあるからチンして食べなさい。母さんは英雄が眠そうなので一緒に寝ます。」 明は読み終わると冷蔵庫から麻婆豆腐を取りだしレンジに入れた。レンジが麻婆豆腐を加熱している間にさっきの手紙を大切に自分の

部屋の机の引き出しにしまった。

ちょうど電子レンジが「ピー」と加熱終了を告げる。

明は欠伸をしながら居間に向かった。

遥の作った麻婆豆腐はやはり美味かった。

明はご飯を食べ終わるとシャワーを浴びてすぐに泥のように眠った。

次の日の日曜日もジムが平日と変わらず19時からなので明は古本屋に向かう事にした。

フルフェイスの真つ黒のヘルメットをかぶり、バイクに跨がる。

自転車で30分の道程をバイトは10分もかからないで走ってくれる。

明は店に入るなり店員に

「『はじめの一步』ありますか？」と聞いた。

無愛想な眼鏡の身長が190センチくらいある店員は並べていた本を乱雑に床に置き歩きはじめた。

何だ？この店員は？

その大きい野比のび太みたいな店員に連れて来られたのはスクエアエニックスの漫画が置かれてる場所だった。

「この漫画面白いよ」のび太店員が差し出したのは『鋼の錬金術師』だった。

「確かに面白いけどさあ……。俺の探してるのは『はじめの一步』なんだけど」明は呆れ顔で渡された『鋼の錬金術師』を元の場所にしまふ。

「『はじめの一步』？そんな事言っていました？」

「あんた何、聞いてんの？」

「そんな事言わなくて良いじゃん。あんたら客は店員を何だと思ってるんだ？」そう言っただけ泣き出したのび太に明は「ご、ごめん」と

謝る。

「嘘だよ」顔を上げたのび太は確かに涙なんて微塵も浮かべてなかった。

「まあこれにこりたら店員をいじめないように」

「解ったから早く『はじめの一步』あるところまで案内してよ」

「はいはい」

のび太店員のせいで結局『はじめの一步』にたどりつくまでに2時間もかった。

結局『はじめの一步』は人気があるためようやく1巻だけを買って古本屋をあとにした。

バイクに跨がり、ヘルメットを被る明に外までおくりに来たのび太店員は「また来てね」と笑っていた。

明は無言で手を振り、心の中で

「二度と来るか」と言った。

家で『はじめの一步』を読んでから夏川ジムに向かう事にした。

ジムでは既に茂次が自転車に乗って待っていた。

「こんにちは。今日もあいつ来てるんですか？」

「ああ。あずましくないから外でお前が来るのを待ってたんじゃないよ。」

「

「はあ…」。明は着替えて茂次と一緒に10キロの道程を走り、大きな木のある公園で休憩をする事になった。

「どうじゃ？10枚とれる自信があるか？」

「いや…。微妙です。」

「漫画は読んだのか？」

「はあ…。読みましたが。」

「なら昨日よりはましじゃろ。それ飲み終わったら早速やってみろ」

「はい。」明は急いで持っていたスポーツ飲料を飲み干し、そのペットボトルを10メートルくらい先のごみ箱に投げた。

「パコーン」という間抜けな音を鳴らしながら吸い込まれるようにペットボトルはごみ箱に入った。  
ベンチから立ち上がる明に茂次は「大丈夫だ」と呟いた。

茂次が後ろで見守る中で明は大きい木を蹴った。

木の悲鳴のように葉が擦れ合う音を出す。

明は『はじめの一步』の主人公のように力まず軽く構えて、落ちてきた葉を左手で取る。

1、2、3。数を数えながら左手を必死に前に突き出す。

4。昨日より取れた。

5、6、7、8、9、10。10枚目を取ろうとした時1枚、葉が手から零れる。

また頭の中で10を数える。

今度は上手く10枚目を取ることが出来た。

明は左手を出したまま、まだ葉が落ちきらない木を見上げた。

さつきより木が小さく見えた。

ジムに戻るといつものように騒がしい声が聞こえる。

「ウチャー、アチャー、左ストレート、右ジャブ」明は一瞬呆れてそれを見ていた。

「どうじゃ？スパリングでもしてみるか？」リングの横で腕組みをしながら小林龍地の動きから目線を明にむけた茂次が明に問う。

「スパリングですかあ？」明は突然の事に困惑した表情を浮かべるが決断したのか顔を上げて「やります」と茂次の目をしっかりと見ながら答えた。

「では二人ともヘッドギアと16オンスのグローブをつける。10分後スパリング開始じゃ」

初めて上がるリングは牢獄のようで、試合が終わるまで出られないと思うと逃げ出したくなる。

明は緊張か恐怖か解らないが体が微かに震えるのを感じた。

「3ラウンドだけだから最初からとばしていけよ。ではファイッ！  
！」

明は左手を軽く伸ばし、小林に挨拶を求める。

小林もそれにあわせて軽く左拳を明の拳に軽くつける。

それを合図にお互い左手を戻し、回りはじめる。

明はスパーリングの前に言われた茂次の言葉を思い出す。

「両方の拳を鼻の所で固定し、脇をしめる。ボディーを打たれても絶対にガードを下げるな。取りあえずこのラウンドは様子見じゃ。」

次のラウンドまでもったら倒し方を教えてやる。解ったな」

明は一瞬茂次の方を向き、また小林の方に目をやる。そしてしっかりと脇をしめ、ガードを固める。

小林は明のから空きのボディーを右ジャブで打つ。

1回、2回、3回。

鈍い音を出しながら小林のジャブは確実に明の体を蝕む。

何度もガードが下がりそうになるのを堪えながら明は前に出る。

それに威圧されたのか小林はズルズル下がった。

ようやく小林をコーナーに追い込む。

「五十嵐、ジャブを出せ。」茂次の声が後ろから聞こえる。それと同時に左手を小林の顔に放つ。

一瞬の出来事で明には何が起こったか理解出来なかった。

一瞬真つ暗になったかと思ったらリングサイドから茂次の声が聞こ

える。自分が倒れてる場所とは反対側に小林が立っている。

「ファイブ、シックス、セブン」困惑のなかカウントが続けられる。足が動かない。

手も動かない。

立ちたいのに立てなかった。

明の願いとは裏腹に無情にも最後のテンカウントが茂次の口から放たれた。

その瞬間明はまた闇の中に吸い込まれた。

「カウンターじゃ」ようやく目を覚ました明に茂次はそういう。

「カ、カウンターですかあ…。」困惑した表情の明に茂次が言う。

「カウンターとはな、相手のパンチにあわせてパンチを出す技でな、自分の力があまりなくても相手の力を利用する分ケーオーに出来るのじゃよ。」

「はあ…。」リングサイドのベンチから起き上がり、明は軽く頭を振る。

「勝てるとは思ってなかったけどやっぱり倒されると悔しいですね。」

茂次も明の隣に座り「まあ、男ならみな倒されると悔しいもんじゃ。お前にもやっぱりそういう感情があつて良かったわい。そういう負けん気という部分がお前には足りないと思うとたからな。」

「はあ…。」

「今日はもう帰れ。明日、じっくりジャブの練習するぞ。」

「は、はい。」明はそう言い、立ち上がり、更衣室に向かった。

明の背中越しに小林龍地の声がジムに響き渡っていた。

明は右頬を右手で確認し、その痛みでまた悔しさが込み上げていた。

## 第一部（6）

左頬を腫らして帰宅した明に遥は心配そうにしていたが言葉では「もうご飯出来てるから手を洗ってきなさい」と平静を装っていた。明は

「腹減ってないから」と言って部屋にとじこもった。

部屋の中はいつもより狭く感じ、いつもは居心地が良いはずのベッドが不快に感じた。

ベッドに横になり天井を見る。

見るというより天井を向くと言った方が適當だろう。

明はただ焦点の合わない目を天井に向けていた。

明の心は悔しさで満ちていた。

その日は疲れがあつたのになかなか寝れなかった。

体は重いのに頭は目が覚めきっている。

明自身も寝る事を望んではいなかったのかもしれない。

ただ右の頬をずっと摩っていた。

次の日明が目覚めたのは12時半過ぎだった。

いつ寝たのか明にも解らなかったが、昨日よりは悔しさが強く自分の心を突き刺さなくなっていた。

悔しさを忘れたわけではなく、悔しさが体の中に吸収され糧になったように明は感じた。

「おはよう」寝ぼけ眼で居間の扉を開ける明に遥は

「あら？遅いお目覚めね」と笑いながら言う。

「今日車の納車の日だからね。」

「もう？」

「そうよ。」

明が居間の白いテーブルの前に胡座をかいて座ると英雄も前足と後ろ足を折って座る犬座りをして明の顔を眺めて首を傾げる。

「何時に車来るの？」

「14時くらいかしら？」「なんかアバウトだね。母さんは。」台所からは水を出す音が聞こえる。

「大丈夫。ちゃんと車屋さんが着いたらうちに尋ねてくれるから。」水の流れる音が止まって、まな板と包丁がぶつかる小気味よい音が聞こえる。

「母さん今日ご飯何？」

「サラダと納豆にしようかと思うんだけど。」

「ああ良いよ。てか俺ご飯食べたら出かけるからおにぎり2個作ってくんない？」

「良いわよ。」

「ありがとう」昼食を食べてバイクで出かける明を見送り、遥は心配する気持ちを吐き出すようにため息を小さくはいた。

「おはようございます」

「おう。今日も19時からって言ってなかったか？」

「やっぱり昨日の負け悔しくて早く来てサンドバッグでも叩こうと思ひまして。」

「そうかあ。良い心掛けじゃ。わしがサンドバッグおさえといてやるか？」

「いや、良いです。ただ気ままに打ちただけなんで」

「そうかあ。」そういうと茂次はまたシャドーボクシングに熱中する。

明は更衣室に向かった。

初めて対峙するサンドバッグは恐怖すら感じる不気味さを放っていた。

先ず軽く左を出してみる。

「パン」と乾いた音がなる。

また左を出す。今度は少し力を入れてみる。

「パン」と音がしてさっきよりサンドバッグが動く。

体があたたまるまで明は軽くジャブをだし続ける。

それを見ていた茂次は

「出すのより引くのを意識してみる。ジャブは相手との距離を計ったりするパンチじゃ倒すパンチではない。だから力まず、力より速さを意識しろ。」

「はい。」明は言われた通りにやってみる。

「あとな、モーシヨンが読まれやすいから肩口から真っ直ぐジャブを出してみる。サンドバッグは体があたたまったらいったんやめて、鏡の前でジャブのフォームを矯正するのじゃ。うまいボクサーのジャブは急にパンチが飛んできたように見えるんじゃ。昨日みたいにジャブにカウンターあわせられないようなパンチを生み出すのじゃ」

「はい。」体中から汗が吹き出してきた明はサンドバッグを打つのをやめた。

鏡の前に立ち、軽くジャブを1回出す。

35キロ痩せた自分の姿が鏡に映る。

昔の自分は嫌いだった。

凄く自分の身なりが嫌いだった。

顔も、体も、鏡に映る自分の全てが嫌いだった。

努力というものを初めてやり、今の体を手に入れる事が出来た。カッコイイとかそういう事ではなく努力に耐えた自分の姿が少し好きになれた気がする。

明は茂次が見守る中、左拳を鏡の自分に向かって突き出す。鏡の自分も自分に向かって拳を突き出す。

ただ何気なく出した拳だったが鏡の自分の拳をかわそうとしてしまった。

「どうした？」手を止める明に茂次が問う。

「鏡の自分の拳が怖くて…」

「お前だけが怖いわけじゃない。鏡の中の自分もお前の拳が怖いんじゃない。恐怖に打ち勝たなければその先は見えてこないぞ。」

「はい。」

夏川茂次の助言は的確だった。

2、3回のアドヴァイスで明のジャブはみるみる上達した。

「ではまた明日お願いします。」茂次に頭を下げて夏川ジムをあとにした。

バイクに跨がる前に軽く左拳を突き出し、明は「よしっ」と言って家に向かう。

「良いだろ？」

「やめてください」

「良いだろ？」

「やめてください」清楚な服装の華奢な女性が左手を出した。「パシッ」と乾いた音が響く。

「いてえーな。殺すぞ。」女性に手をあげる。

「きゃっ」女性は路上に倒れた。

バイクを止めて、家の近くの公園で星を眺めていた明にその綺麗な星空とは不釣り合いの悲鳴が聞こえた。

明は回りを見渡す。

街灯もない暗い公園だったが微かに何かが動くのが見えた。恐る恐る近づく。

まだ声の主達は明に気付いてないようだった。近づいて解ったがやくざ風の男に清楚な身なりの女性が襲われそうになっていた。

明は恐怖で足が震えていた。

幸にも女性は明に気付いていない。

明は一瞬逃げ出しそうになったがジムでの茂次の言葉を思い出した。震える足を無理矢理黙らせて明は男に近づいた。

「おい、おっさん。嫌がつてるだろ？やめろよ」

「あん？」清楚な女性に抱き着こうとしているのをやめ男は振り返る。

腕には入れ墨が入っている。明は逃げ出したくなったが、女性は助けを求めるかのような目を明に向けたので引くに引けなくなってしまった。

「だからやめろっていつてんだろ？」間髪入れず親父が殴り掛かってくる。

小林の方が速かったなあ。

そう思いながらやくざ風の男の右拳を受け止める。男の動きがあまりにも遅すぎて少し気がぬけた。

受け止められた手をとろうとする男の右拳を握り潰す。

「ヒィー」男は悲鳴をあげる。

明は男の拳をはなし、ジャブを男の腹に5発くらわせた。規則正しく「グチャ」という音が5回なり、男はその場に倒れた。

「ありがとうございます」ビッグスクーターの後座席から降りた女性  
性は深々と明に頭を下げた。

「いや、良いですって」明はフルフェイスのヘルメットをぬいで答える。

「本当に助かりました。連絡先教えていただいてもよろしいですか？何かお礼したくて。」

「はあ…」明は携帯電話を右ポケットから取り出す。

「まだテスト終わってないんでいつお礼出来るか解りませんが必ずお礼しますので。」

「いいですよ。気にしないでください。」そういつと明はヘルメットを被り、その場を立ち去る。

明の背中に女性はい

「ありがとうございます」と体に似合わない大きさの声で言った。

帰宅し、ご飯を食べ、シャワーに入り、すぐに自分の部屋のベッドで横になる。

天井に向かって拳を突き出してみる。なんだか今までの自分の拳より大きく見えた。

その日はぐっすり寝る事が出来た。

携帯電話のアームが重い瞼を無理矢理こじ開けてくる。  
必死で鉛のような瞼に力を入れ、明はベッドから出た。  
カーテンからは光が漏れだしベッドから出た明を照らしている。  
左手にはまだ昨日の感触が残ってる気がした。

居間は遥の姿はなかった。

居間の奥の出窓でひなたぼっこをしながら寝ていた英雄が目覚まし、後ろ脚で赤い首輪の周りをかく。

それから出窓から飛び降り、冷蔵庫から麦茶を探す明の足に擦り寄る。

明は左手に麦茶を持ち、右手で冷蔵庫の扉を閉じ、その手で足元の英雄の頭を撫でてやる。

英雄はうれしそうに

「クウーン」と鳴いて目を閉じた。

土曜日、日曜日と連休の次の日の月曜日はクラス全体がボーッとした感じがする。

授業中でもどこか上の空の生徒が目立つ。明は今日も氷室と蘇我がいないのに疑問を覚えながらも4時限目の早乙女の現代文の授業に没頭する事は出来なかった。

気付くと上の空で左手をにぎりしめていた。

チャイムが鳴り、生徒がいつせいに立ち上がる。

明もそのうちの一人だった。

うまいもん、食べてえくなあ…。

明の足は自然と学食へと向けられていた。

「おー。また来たか。」

「はあ…。」むさ苦しい顔面凶器を近づけてくる早乙女に困りながらも食べたかった

「オムライス」を頼み明は席についた。

10分くらいしてドスのきいた早乙女の声が学食の中に響く。  
明はオムライスをとりに向かう。

やっぱり早乙女の手から作り出された料理は完璧だった。

明は夢中で平らげ精算をするために入口近くのレジに向かう。

「3150円な」

「あのさ、前から聞こうと思ってただけで何でこんなたけえの？」「教師に向かってタメ口か？まあその度胸に免じて教えてやるわ。」

「基本的に材料費がかかるんだよ。俺は妥協出来ない性格だから。だからどんな料理でも最高の食材を使ってるんだ。だから高くなるの。」

「なんかたいした理由じゃないんだね。」

「まあ当たり前前の事だからな。」明はお金を払いその場をあとにした。

ジムに着くと茂次が

「今日もスパーリングじゃ」と言って明を出迎えた。

着替えて軽くウォーミングアップをし、リングに上がる。

目の前には昨日負けた小林が見下した目を向けてきた。

明はそれを睨み返した。

「カーン」とゴングがなり、茂次の

「ファイツ」と言う掛け声とともに明と小林は拳を突き出し挨拶をし、また周り始めた。

茂次がスパarringをとめたのは1ラウンドから数えて6回目のダウンを奪った時だった。

「もう無理じゃな。」茂次はタオルを投げてそう言った。

「いや、まだ出来ます。」小林は必死に立ち上がるうとするが足が言う事を聞いてくれず、尻餅をつく。

「もう今日は無理じゃよ。既にテンカウントで立ててないじゃろが。」茂次は小林の腕をとり、自分の肩をかけてリングから小林を下ろし、リングサイドのベンチで横にした。

「五十嵐、お前、いつものランニングコース走ってこい。」

「は、はい」明は16オンスのグローブを脱ぎ、ジムを出た。

明の姿が見えなくなると茂次は小林に向かって

「今日の敗因は解るか？」と言う。

濡れたタオルを目に当てた小林が答える。

「昨日勝ったからなめてました。」悔しそうに答える小林に茂次は「それは1ラウンドの最初のダウンまでじゃろ？お前の敗因は自分から攻めに行かずにカウンターばかりを狙ってた事じゃよ。それとあいつのジャブの凄さじゃな」

「はあ…」そう言った小林の体は悔しさで震えていた。

神社の境内の階段を全力で登る。合計2782段ある階段を駆け上がるのは一苦労だった。

明は左拳を突き出し小さく

「シュツ」と言う。

サウナスーツを着込んだ体は汗で大雨の中を傘をささないままの状

態のように濡れていた。

神社の階段を登り終え、最後の階段で座り

「フーツ」と小さなため息をつく。

自分の拳が昨日よりまた大きく感じた。

ジムに戻ると小林の姿は見えなかった。

茂次に聞くと帰ったらしい。明もその日はランニングを終えて帰宅した。

昨日のスパリングで小林に勝った事で明の頭の中から氷室と蘇我の事は消えていた。

次の日帰宅しようとした時、明の携帯電話に着信があった。

「はい」バイクに跨がり、ヘルメットを左手に持ち右手で電話に出る。

「五十嵐さんですか？」

「はい。そうだけど。」

「この前助けていただいた椎名志保といいます」

「ああ。で、どうしたんですか？」「テスト余裕なんでお礼をしたいなと…」電話の相手の椎名はなんだか恐る恐る話してるのか声が小さかった。

「良いですよ。そんなの」

「いや。それは出来ません。助けていただいたんですから。」

「解りました。ではお礼していただきます。」

電話越しに椎名の小さな笑い声が聞こえる。

「今日とか大丈夫ですか？」

「ずいぶん唐突ですね。」

「すみません。今日20時に江別駅で待ち合わせしませんか?」「はあ…。良いですよ。」「明は小さい声の電話相手におされてる自分が笑えた。

「では20時に江別駅で。」

「了解」

急に用事が出来たため自宅に帰らずにすぐにジムに向かう事にした。

「おはようございます。」

「どうした?まだ時間じゃないぞ」

「はあ…。解ってるんですが急に20時から予定が入りまして。」

「女性は大切にしなきゃじゃぞ」

「女となんて言ってないじゃないですか」慌てる明に茂次は

「顔に書いてるぞ」と言い、笑う。

やっぱり親父さんには勝てねえな。

この日の明のメニューは25キロを走った後、ジャブのフォームチェックを8ラウンド(1ラウンド3分)と縄跳び8ラウンド、腹筋300回、腕立て伏せ300回、背筋300回、スクワット300回とストレッチだった。

江別駅に着き、ヘルメットを脱ごうとした時後から声が聞こえた。

「五十嵐さん」明は声の主を探す。

駅から出て来る椎名の姿が明の瞳に映る。

「お久しぶりです」どうしていいか解らない明に椎名は「またバイクの後ろに乗っていいですか？」と言い笑う。

椎名を乗せた明のバイクは街中に向かう。

左ウィンカーを出して曲がり、また右に曲がる。

街中のはずなのに明には見慣れない景色が広がる。

信号で止まった時、明の後から椎名が話しかけてきた。

「次の信号右に曲がったら目的地です。」明は返事の代わりに右手を軽く上げる。

信号が変わりはしりだす。

明と椎名が着いた場所は美容室のような場所だった。

「ここって美容室ですよね？」ヘルメットをぬいだ明が椎名に問う。

「そうですよ。」椎名はバイクの後からおりてそういう。

「なんで美容室？」明はバイクのエンジンを切り、首をかしげる。

「五十嵐さんかっこいいのに髪の毛とか服装とか適当でもつたいないから今日はうちのお兄ちゃん美容室で変身してもらおうかな？って思いました」小さく自信のない声はみるかげもなくなっていた。

「はあ…」明はそう答えるしかなかった。

椎名の兄の美容室

「椎名組」はネーミングセンスとは裏腹に白を基調とした店内は洗練され綺麗だった。

「いらっしやいませ」明と椎名が入店すると活気に溢れた声が聞こえる。

「田中さん、お兄ちゃんいます?」椎名は出入口の近くのレジにいた若い今風の男性に声をかけた。

「社長かい?今2階の事務所にいるからちょっと内線で呼ぶから椅子にかけて」田中と呼ばれた男はレジの向かいの椅子を指差し、すぐにその右手で電話のボタンを押し始めた。

5分くらいして奥からどっからどうみてもジャンニーズかモデルにしか見えない男が現れた。

「お?どうした志保」男は立ち上がる志保に向かってそう言った。

「前、助けてくれた五十嵐さんをおつかい良くしてほしいから連れてきた。」明を見る椎名楓の目に悪意が感じられた。

「先日はうちの妹を助けていただきありがとうございます」深々と明に頭をさげる楓に明は戸惑いながら

「良いですよ。そんな...。」と言う。

「今日は俺があなたを超かっこよくしてあげるから」ポーズをしながらウインクをしても楓はかっこよかった。「よろしく願いします」はにかみながらそういう明に楓は

「まかせなさい」と言いまたウインクをした。

## 第一部（7）

明のボサボサにのびた髪の毛と眉毛と髭の断髪式は志保の見守る中、楓の手で行われた。

まずは椎名組の構成員…ではなく新人の男性によるシャンプーとリンスが行われた。

その最中に椎名兄妹は明の今後について話し合っている。

今まで美容室なんて女の行く場所だと思ってた明は床屋のシャンプーとスタイルと全く異なるのとこれからどのように変えられるかの不安で気持ちいいはずのシャンプーがなんだか最後の晚餐のような感じがした。

シャンプーなどが終わり、楓の前に連れて来られた明はひきつっている自分の顔を見て笑いそうになった。

「でははじめるよ」優しい声が店内に響く。

新人の美容師や、まわりの美容師達が固唾を飲んで明の髪をいじる楓の手に集中した。

たかが髪を切る作業にも関わらず店内には張り詰めた空気が漂っていた。

「良く、こんなに髪の毛のばしたね。」楓は毛先を見ながら言う。

「はあ…」明は居心地が悪くて仕方なかった。

「では行くよ。」楓の顔から笑みが消え、美容師の顔付きになった。ますます空気が張り詰める。ハサミの動きに合わせて髪の毛が落ちる。

フローリングの床を黒く染めていく。

明は次第に疲れで深い眠りの中に吸い込まれていった。

「はい、終わったよ。」肩を叩かれ起きる明に鏡越しに笑う楓の顔が飛び込んでくる。

鏡にはもう一人見慣れない人が映っていた。

その見慣れない人は明の動きに合わせて動く。

茶色の髪、良く整えられた眉毛、形の綺麗な鼻、二重で大きい目、吸い込まれるような唇。明は目の前の綺麗な顔の男が誰だか戸惑い自分と違いに落胆した。

「五十嵐君どうだい？」最初楓の言葉の意味が解らなかった。

「え？」明は目を左右に動かしたあと俯く。

「鏡の中の自分はどうだい？」明はすぐにその言葉に反応する事は出来なかった。少しの間を置いて理解した明は

「ありがとうございます」と頭を下げた。

「これからは妹の志保に五十嵐君をコウディネートしてもらうから」明を立てて楓はさういう。

「髪型とかでずいぶん変わりましたね。五十嵐さんカッコイイですよ」明を見て志保は微笑む。

志保は楓に

「ありがとう」と言いお金を払い2人は椎名組をあとにした。

また明のバイクで志保の案内である場所に向かう。

今度はどこか見慣れた景色が広がる。

車通りののびのびした場所を右折すると

「洋服椎名組」の看板が目に入って来た。

「ここです」明はその看板に呆れた目を向けた。

「ここもしかしてお母さんが経営してるのか？」冗談混じりにそう

いう明に真顔で志保が

「そうですよ。なんで解ったんですか？」驚いた顔で志保が答える。

「いや…普通解るよ…」明ははにかんで

「洋服椎名組」の看板を見上げた。

やっぱり店内は白を基調とした洗練された綺麗なお店だった。

入口にある

「男」と

「女」という銭湯みたいな暖簾を除けば。

もちろん明と志保は

「男」の暖簾をくぐった。

すぐに店員達の声が飛び交う。

「いらっしやいませ」次々にその言葉が飛び交い、BGMのユーゼンが店の雰囲気盛り上げる。

「ママいます？」志保は髭のはえたダンディーな店員に尋ねる。

「社長は今出掛けてますよ。今日はもう戻られないと言っておられました」が、申し訳なさそうに髭の男は話すが、志保は

「良かった。うちが来た事言わないで下さいね。」そういつと志保は服を選び始めた。

明も自分で服を物色し始める。

1時間くらいして志保が選出したのは黒いスーツだった。

「ワイシャツは薄いブルーでネクタイは黒一色革靴も黒で統一して」明に服のチョイスのコンセプトを話し、試着室に明を閉じ込める。

「着替え終わったら教えてくださいね。」

服を脱ぎ、ワイシャツに手を通す、ボタンを上までしめて、スポンをはく、ベルトを調節し、靴下をはき、ネクタイに手がのびたがためらい、試着室のカーテンを開けた。

「あれ？ネクタイ嫌いですか？」明は首を振り黙り込む。

「もしかしてネクタイしめれないんですかあ？」明は小さく頷く。

「では後向いてください。」志保は明の後から明にネクタイをしめてあげる。

明の鼻にシャンプーの香が漂ってくる。

なんだか恥ずかしくなり顔が赤くなるのを感じた。

「はい。おしまいです。上着を着てください」志保は明にスーツの上を手渡す。

真っ黒のスーツに袖を通す。

志保は固唾を飲んで見守る。

「五十嵐さん、似合いますよ。凄いかっこいいです。」志保の目は嬉しさで満ちている。

志保の言葉に照れながら明は自分を姿を試着室の鏡に映した。

昔の自分からは想像も出来ない姿が映し出された。

目は二重で瞼の上の厚い脂肪がどかされ、隠れてた目があらわになり、大きなビー玉のような目が光を放ち、形の良い唇は綺麗な赤色が宿り、更に綺麗さを際立たせている。鼻は綺麗に整っており、左右に見事に顔を分けている。

楓のカット技術と整髪の巧みさ、志保の服のセンス、全てが明を引き立てている。

明は志保の方を向き直り

「ありがとう」と小さく言った。

「うん。うちこそありがとうですよ。助けてくれて」志保は微笑み、明もそれにつられて笑った。

「そうだ。せっかくオシャレしたんだからデートしませんか？」志保は明の顔を覗き込む。

しばらくして明は

「良いですよ」と言い、2人は店をあとにした。

志保の案内で札幌のすすきのをバイクで走る。

夜のすすきののは昼間と逆で、すっかり目を覚ましてる。朝はすごく眠たそうな街が見えるほど生き生きしている。

明と志保は細い路地に入り明はバイクのキーを抜いた。

バイクからおりた志保が口を開く。

「ちよつとここで待って下さい。うち着替えてきますから。五十嵐さんばかりオシャレしてずるいでもん」そう言って志保は大きいマンシヨンの中に消えていった。

明はおもむろに携帯電話を取り出した。

最近疲れてて見てなかった品川ヒロシのブログと若槻千夏をブログをチェックする。

尖ってたものがなんだか丸くなる気がした。

華やかな世界にいる2人も大変なんだと解る。

どんなところにいようが自分の居場所を守るためには努力が必要なんだと解る。

明は携帯電話をしまい軽くシャドーボクシングをする。

左ジャブ、教わってない右を出そうと思いためらう。

自信のない右拳が小さく見える。

そのまま自分の小さな右拳を左手で包み見つめる。

近くで見てもやっぱり小さくてため息が出そうになる。

「お待たせしました。」そう言つてマンションから出てきた志保は見違えるほど綺麗だった。

きっと明自身志保をまじまじと見つめたことがなかったのだろう。透き通るような白い肌に大きな目、小さい唇、形の良い鼻。

明はしばらく志保に見とれてしまった。

「どうしました？」志保は明の顔を覗き込み首を傾げる。我に還つた明は首を振り

「な、何でもないです」と言い照れ笑いをする。

「さあ行きますかあ？」

椎名志保を乗せてまたすすきの街をバイクで走る。

明の背中に志保の体温が感じる。

今まで感じたことのない温もりがそこにあった。

明は志保の指示に従いすすきのの小さい路地を左折し、小さいバーの前でバイクのエンジンを切った。

「ここがうちのいきつけのバーです」看板には『バー馬場』とネーミングセンスのかけらもない名前が飾つてある。

志保は明を誘うようにバーのドアを開けた。

「いらっしやいませ」扉の向こうには絵に描いた髭をはやしたマスターが顔を出している。

「こんばんはマスター」志保は頭を下げてマスターと何やら話している。

明は途方にくれてあてもなく周りを見渡してみる。

レトロな感じのバーで古いジュークボックスが今でも店のBGMを支えている。

流れてくる曲は店のムードをもり立ててはいるが明にはさっぱり解らない曲ばかりだった。

曲を変えてみたくて財布から小銭を取り出そうとした時、マスター

と話しをしていた志保が

「話し込んでやってすみません。カウンターの奥に座って良いみたいですよ」と言ってお明を誘う。

バーの中には明達の他にも数十人くらいいて混んでいた。

3ヶ所のカウンターがあり、そこにバーテンが一人づついて、引っこなしに客のお目当てを作っている。

入口に一番近くの明達のカウンターにいるバーテンが店長でやはり一番忙しそうにしている。

「五十嵐さん何飲みます？」志保はお酒のかかれたメニューの場所を差し出す。

「バイクありますし、僕未成年なんで…」明の目はソフトドリンクの文字を探してた。

「え？五十嵐さんって未成年なんですか？」本当に驚いた表情をした志保に

「そうですね…まだ16です…」なんか罪悪感がわいてきた明は思わず

「すみません」と言ってしまった。

「謝らなくて良いんですよ。うちが勘違いしてただけですから。」

「はあ…」頭をかく明に

「じゃ、こっちの方が良いですね」と言ってお明のソフトドリンクの品名がかかれたメニューを見せた。

「僕コーラが良いです」明は照れながら言う。

「うちはクーニャンにします。」

「てか椎名さんって何歳何ですか？」

「一応今年二十歳になりました。4月10日が誕生日なんですよ」

「え？僕と誕生日一緒ですね」何だかお互い共通点を見つけて少し安心した。

「はい。クーニャンとコーラになります」マスターの馬場が飲み物

を明と志保の前に差し出した。

「ありがとうございます」と言って志保が受け取る。

「では乾杯」2人はお互いのグラスをぶつけ合った。

「椎名さん、家着きましたよ」明は自分の背中にもたれて寝ている志保を自分の肩越しに起こす。

「鞆の財布から鍵出して下さい」酔いで呂律がまわってない志保の言葉をなんとか理解し、明は仕方なしに志保が持っている小さなヴィトンの鞆からヴィトンの財布を出してその中の鍵を取り出した。明はしっかりと志保をおんぶしなおして、オートロックを解除した。静かに自動ドアが開き、明は志保をうしろにおんぶしながら5台あるエレベーターのなかで1番速くきたのに乗り込んだ。

「椎名さん、何階ですか？」

「30…」志保はそういうとまた寝てしまった。

「30ね、はあ…」明は1番上の30のボタンを押した。

「椎名さん、何号室ですか？」肩越しに志保の肩を叩いてみる。

「うん？3007…」また寝てしまった志保を呆れた目で見ながら明は3007という数字を探した。

「着きましたよ。」明は鍵を開けながら志保を起こす。

## 第一部（8）

今度はゆすつても声をかけても全く起きない。

明は寝室を探すことにした。

志保の家は本当に大きく、寝室を探すのも何回かドアを開ける必要があった。

靴や、部屋の雰囲気はどうやら一人で暮らしてるらしい。

明は寝室の場所をつきとめて、玄関で寝かせたままの志保をつれに戻った。

志保はまだ熟睡してるみたいだった。

志保を抱えて、寝室に行く。

寝室はベッド以外何もないこの家で一番小さい部屋だった。

静かに志保をベッドに寝かせて明は部屋を立ち去ろうとした時だった。

「亮太、うちを裏切らないって言ったじゃん。」慌てて明は志保の方を振り返った。

そこには夢にうなされて志保の姿があった。

泣きながら

「亮太」と囁いてる。

明は辛くなり、急いで志保の家をあとにした。  
鍵は郵便ポストに入れた。

帰り道、明は法定速度なんて無視をしてバイクを飛ばした。

光が細い光になり、明の目に入ってくる。

目の前にテールランプが見える。

それも、1や2ではなく何十台ものバイクの集団が明の前を遮る。

明は小さい隙間を見つけてその集団をかわす。

明の行動に止まってたバイクの集団がいつせいに動き出した。

爆音を出して明のバイクに近づいてくる。

明はアクセルをさらに強くまわした。

コーナーを120キロで曲がる。

曲がり切れずにコーナーのガードレールにぶつかるバイクの音が聞こえる。

明はさらにアクセルスロットルをまわす。

まだしつこく数台のバイクがついてくる。

明は面倒になってバイクを止めた。

そこは人気のない閑散とした公園だった。

「お前、誰の許可受けて俺らの前走ってんだ？」バイクからおりてきたノーヘルの金髪が言う。

「道はしんのに許可なんていらねえじゃん。その金色のオツムは飾り？」明が答える。

「まあ、良いや。今日でお前死ぬんだからな。」そう言つて金髪の男、紫頭の男、スキンヘッドの男が明に殴り掛かってきた。

とれえ。

明はくる攻撃を全てかわし、ボディーを全員に5発づつくらわせた。3人は明の目の前でうずくまり、嘔吐した。

「あんたら意気がつてるだけでよえじゃん。」明はそう言つと3人の顔を順番に蹴り上げた。

男達はバイクにまたがり逃げ去った。

明はネクタイを緩めて空をあおいだ。

明の瞳には寂しそうに浮かぶ月が浮かんでいた。

暴走族を撃退してから明は毎日喧嘩にあけくれるようになった。

街で肩がぶつかっただけで相手を殴り飛ばし、意気がつてる不良に自分からからんでいった。

「よえゝのに調子にのるなよ」明は倒れてる鼻ピアスをしている金髪野郎に唾を吐く。

「覚えてろよ。必ず報復してやるからな」うずくまりながら強がり、鼻ピアス男は意識を失った。

明はその男を蹴り倒し、バイクに跨がりその場をあとにした。

次の日明がジムに向かう途中20台のバイクに囲まれた。

爆音を出しながら明のバイクの進路を塞ぐ。

一つのバイクが明のバイクの前輪に鉄パイプを突っ込んできた。

明のバイクはジャックナイフのように前のめりなり、明を空中に押し出した。

明はガードレールにたたきつけられそうになるが猫のように上半身と下半身を逆方向にひねり仰向けだったのを四つん這いになり足とライダークラブをしている手を地面にこすりつけて摩擦でギリギリガードレールに衝突を回避した。

「あっちいー」明は右手を振った。

「焦げちゃった…」やけどのように皮のむけた右手を見て明は呟いた。

明は立ち上がり後ろから突っ込んでくるバイクの軍団を見据えた。爆音を出して明に突っ込んでくる。

3台がウイリーをして明に向かってくる。

明はバイクに背をむけてガードレールに立った。

そんな明を構わずにバイクはウイリーで突っ込んでくる。

明バイクが明にすれすれに近づいてくるのを見計らってバックテン

をして3台のバイクの後ろをとった。

明はそのまま運転手を蹴り倒し、最後にバイクを倒れてる暴走族の上に律義に置いてあげた。

3人は

「うつつ」と唸りながら気絶した。

残りあと、17台…。

明は自分のバイク目掛けてダッシュした。

それを見逃すまいと17台のバイクが明を目指して突っ込んでくる。ギリギリ髪の毛を掴まれそうになったがジャブでそいつの手をかわして、自分倒れてるバイクに跨がりアクセルを全開にした。

急にアクセルを全開にしたもんだからワイリーしたバイクをなだめるように明は優しく、そして力強くバイクを操縦した。

明はバイクの群れを引き連れて、走り出した。

明の華麗な運転に半数はついて来れず、転倒したり、他の車両にぶつかったりした。

そしてようやく明はバイクを止めた。

そこは人が一人やつと通れるくらいの幅のビルとビルの間だった。

明はその中にダッシュで入り、暴走族を待った。

明の考え通り一列になり明に近づいてくる。

明は得意のジャブをくるやつ全員におみまいした。

この日明は20人全員を倒した。

顔と体に傷をおった明が帰宅すると遥がこう言った。

「あんだどうしたのその傷」

「なんでもねえよ」

「親にその口の聞き方は何」

明は

「うつせーんだよ」と吐き捨て遙の顔を平手で叩いた。

明の罵声に反応して居間にいた勉が玄関に顔を出した。

「姉貴どうした？」倒れてる遙をみて勉の表情が変わった。

「おい、明お前女に手をあげるなんてどういうことだ？」

「そののばあがうるせえ」から調教したんだよ。「そういつて明は自分の部屋に行こうとするが勉は明の右手を取りそれを妨げようとする。」

その手を振りほどこうとするが勉の手はなかなかふりほどけない。

そして明は左拳で勉の顔を何回も殴った。

何度も鈍い音がするが勉の手は明の右手を握ったまま放さない。

「あんた俺の親父じゃないだろ？なんでこんなガキに殴られてなくりかえさねえ」んだよ。「明はその場に泣き崩れた。」

「ジムに通って力ついたの解るがな、俺は全くおまえが強くなったなんておもわねえ。」ボコボコに腫れた顔で明の目を見つめる勉に明は吸い込まれそうな感覚を覚えた。

「本当の強さってやつは人を守るためにあるんだ。他人を傷つけるためのものじゃない」勉はそういつて明の手を放した。

明の目からは涙がとめどなく流れた。

次の日、久々にジムに行くことにした明は寝ている遙に置き手紙を出掛けた。

「母さん、昨日はごめん。たった一人の大切な母さんを傷つけてしまつて…。俺、本当の意味で強くなるから。母さんを守る男になるから。本当にごめん。」遙はその置き手紙を大切にしまつて時間を確認してまた横になった。

朝7時の事だった。

「おはようございます。」明はまだ暗いジムの扉を開けてそう言った。

奥から人影が動く。

あくびをしながら夏川茂次が顔を出した。

「なんじゃ？久々に顔を出したかと思ったらお前か」明は会釈した。

「またご指導お願いします。」明はさらに頭を下げた。

「なんじゃ？目の中の闇が綺麗になくなっておるな。どうしたんじや？」明の顔を覗き込む茂次に明は照れながら

「秘密です」とはにかんで答えた。

明がトレーニングウェアに着替えてロッカー室から出て来ると茂次が明に

「今日は右ストレートを教えてやる。」明はうれしそうに

「ありがとうございます」と茂次に頭を下げた。

明はサンドバッグと対峙して茂次から教えるこう。

「まずは体重移動が大切じゃ。」

「はい」

「右足から体重を左足に移すと同時に右手を突き出すんじゃ。その時左手を引くとスムーズに右手が出るぞ。」明はその通りにやってみる。

「スドンッッ！！！！！！」大きな音を出してサンドバッグが跳ね上がる。

「相変わらず飲み込みが早いな」茂次は感心して明に右ストレートを続けさせた。

明が右ストレートを出すたびに大きな音を出して大きくサンドバッグが揺れた。

## 第一部（完）

「ただいま」明は家の玄関のドアを開いた。

「お帰りなさい」遥は顔に湿布を小さくしたのをはった顔に笑顔を浮かべて明を出迎えた。

「母さん、マジごめんね」明は深く頭を下げた。

「良いのよ。昔、あんたが小さい時母さんも同じくあんたを殴った事あるから」遥は苦笑いを浮かべて明の頭をなでた。  
遥を追うように英雄が居間のドアを開いて出てきた。

明はしゃがんで英雄の目線になり

「ただいま」と言った。

英雄は

「おかえり」と言うように

「ワン」と言つて撫でる明の手を舐めた。

明と遥と英雄で居間で夕食をとり、この日、明は疲れて居間で寝てしまった。

もう昔みたいに抱えてベッドまで誘えなくなった大きい息子の寝顔を見て遥は微笑み、布団をかけてやった。

明の寝顔は昔のままだった。

次の日明は朝5時に起きた。

起きるにはまだ早いと思つたが目をつむつても寝れないのでしばらくぼーっと天井を見てそれからロードワークに出掛けた。

朝の空気が明の頬を冷やし、すがすがしかった。

明が外に出ると玄関のドアを英雄がひっかいた。

明はドアを開けて英雄を外に出してあげた。

英雄と一緒に20キロの道のりを走った。

毎日散歩するとはいえ、英雄は離されずに明についてくる。

明は玄関でタオルで汗を拭い家に入った。

まだ遥は寝ているようで家には静けさが漂っていた。

遥が起きてないのは解っていたが一応

「ただいま」と呟く。

英雄も明の声に呼応するかのように小さく

「ワン」と鳴いた。

明は雑巾を濡らし、玄関でおとなしく待つ英雄の足を拭いてあげた。  
英雄は気持ち良さそうに

「クウン」鳴いて尻尾を振った。

それから明は遥のために朝食を作った。

ハムエッグに、トーストと紅茶。

7時ちょうどに遥が起きてきて朝食の準備が出来てるのを見て驚き  
その場で泣き崩れた。

恐怖感にもた緊張から解き放たれたのだろう。

明は

「ごめんね」と何度も言いながら母親の背中をさすった。

明も摩りながら涙がとめどなく流れて来た。

氷室との決戦の日は嫌味なくらい快晴で明は太陽を睨み付けた。  
それでも睨み返してくるかのようには太陽は明を照らした。

近いと思ってたリングのある場所が意外に遠くて10分くらい遅刻したが、宮本武蔵も巖流島で遅刻をしたのを思い出し堂々と鉄の扉を開いたが、まだ氷室達は来ていなかった。

暇だったのでボクシングのリングの真ん中で大の字で寝てみることにした。

なにかの倉庫だったのか鉄の鍼がいくえにも交差している。

建物じたいはかなり古いものだろうがまだまだ壊れそうにもなかった。

真っ暗な倉庫に微かに光が差し込んでいる。

明が到着して約20分くらいたたただろうか？

薄暗い闇を照らすかのように倉庫の扉が開いた。

「待たせたな」氷室の声が倉庫を包み込む。

明はあぐらをかいて氷室の方を向き出迎えた。

「お前誰だ？」真っ黒に日焼けした白のタンクトップの濃顔が明に向かってそう言った。

「明だけど」それを聞いた氷室達は啞然とした。

「嘘だろ？替え玉でももう少しまともな奴用意しろよ」氷室は吹き出しながらそう言った。

「本物だし。DNA鑑定でもして確かめる？その変わり決戦の日延びちゃうけど（笑）」明は氷室を真っ直ぐに見つめた。

「まあ、良いや。替え玉でもどうでも、お前の方があのデブより強そうだし」氷室はリングの中に入った。

「さあ、やるかあ。最近うずつちやってさあ。ボクチンの息子がビンビンでさあ」真っ黒な濃顔が吹き出す。

「んじゃショートタイム」氷室がさういうと閉じていた倉庫の窓の力ーテンが一斉に開いた。

それと同時にゴングがなった。

それを合図に明は立ち上がった。

氷室が右足を明の顔面に放って来たからだ。

ギリギリの所でそれをかわし、立ち上がり、明は頭の中で勉に謝り、左拳を氷室の顔面目標けて突き出す。

氷室はそれをよけたが右拳はよけきれず左頬が少し切れて血が吹き出した。

氷室は頬の血を確認するように左手で頬を触り、手についた血を舐めた。

「さあ、パワーアップしようかな？」そういうと氷室は

「アー」と叫んだ。

そしてまた明に右足を突き出してくる。

今度は当たった。

明は数メートル飛ばされて、その場に気絶した。

バシヤツと音を出して明の顔に水がかけられた。

氷室達は明を見下すように笑っている。

「俺の勝ち」氷室は純真無垢な少年のような笑顔を見せた。

「お前がいじめられてたの知ってた。たださ、俺中身のないやつ嫌いなんだよね。だからお前がちゃんと本物になるために試練を与えたわけ。解る？」

明は軽く頷いた。

「だから、お前は試練に打ち勝ったわけ。今まで喧嘩沢山したけど俺に一発あてたやつなんていなかったしね。お前十分強いよ。明日からっーか今日から仲間だ。解った？」そういうと氷室は明に手を差し延べた。

その手をつかみ起き上がった。

その瞬間また扉が開いた。

「また喧嘩してたでしょ？」高いかわいい声が倉庫を包んだ。

怒ってるのは確かだがそれでも可愛いのであまり怒られてる気がしない。

声の主がリングにあがってきた。そして明の顔を見て

「大丈夫」と覗き込んで来た。

明はあまりの可愛さに見とれてしまい何も発する事が出来なかった。「ひーちゃん、もう喧嘩はしないっていつてたわよね？」明の様子を見ながら結城里奈がそういった。

「喧嘩じゃねえよ。拳で語ってたんだよ。」氷室は助けを求めるかのように回りを見渡した。

「解りました。ではうちと拳で語りますか？」里奈はファイティンポーズをとり、氷室の方を向いた。

「勘弁してくれよ。俺が悪かったよ。」

「解ればよろしい」そういつて里奈は腰に手をあてた。思わずそのばで4人は笑い出した。

次の日、明はジムを辞める手続きをするために夏川ジムに向かった。

ジムに着くと珍しく茂次がシャドーをしていた。

「おはようございます」

「おはよさん」シャドーをやめて明の方を茂次は向く。

「どうじゃ勝ったか？」

「やっぱり親父さんには勝てないや…」

明は笑顔で

「負けました」と言った。

その日も嫌味なくらい太陽が地上を照らしていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2404c/>

---

手のひらを太陽に。

2010年10月16日00時35分発行